

ヒロイン  
俺がラブコメ彼女を絶対に奪い取るまで。

戸塚 陸

---



ファンタジア文庫

2942



C  
O  
N  
T  
E  
N  
T  
S

●	●	●	●	●
【一章】	【二章】	【三章】	【四章】	【五章】
きつかけはラブレター	鹿野彩夏のターン	本命は誰なのでしょうか	水面下の宣戦布告	ブーメラン・ハリケーンスマッシュ
007	056	133	181	254
			エピソード	あとがき
				298

俺がラブコメ  
彼女を  
絶対に  
奪い取るまで。

orega  
lovecome heroine wo  
zettaini ubaitaru  
made.



Author Tozuka riku  
Illust. Konbu wakame

口絵・本文イラスト 昆布わかめ



なるせ かずおみ

成瀬和臣

松場高校一年C組。  
自信家であり努力家。  
勝つためなら  
どんな犠牲も厭わない



くまがい はな

熊谷花

松場高校一年C組。  
天然だが家庭的、  
Sの主人公の  
中心になろうとしない



かの あやか

鹿野彩夏

松場高校一年A組。  
「アヤ」という愛称の  
現役アイドル。  
校内にもファンが多い



おきつ このの

沖津琴乃

松場高校一年D組。  
品行方正なクラス委員長。  
どこか他者を寄せつけない  
雰囲気を持つ



くろひ なみく

黒日奈美玖

松場高校一年C組。  
「沼底の魔女」という  
あだ名が、校内でも  
なっているが……?

## CHARACTER

orega lovecome heroine wo  
zettain ubairoru made.

登場人物  
紹介

Illustration  
Konbu wakame

——安心して、ぼくのクズ王子。たとえ負け犬のまま終わろうとも、ぼくはずっと見ていてあげるから。

そう言っつて、あの女——黒日奈美玖は不敵に笑った。  
今にして思えば、俺は最初からあいつの手の上で転がされていたのかもしれない。

## 一章 きっかけはラブレター

季節は春。

桜が散り、肌寒さを感じることもない陽気の中。

耳を澄ませば、今日も今日とて色めき立つ女子生徒たちの声が聞こえてくる。

「ねえ見て、あれって二年の成瀬先輩じゃない？」

「ほんとだ！ やだ、超かっこいい〜！」

「もう見てるだけで幸せ〜！ かっこよすぎて声なんてかけられないよね〜！」

校内を歩くだけでこの通り。

俺、成瀬和臣はいわゆる人気者だ。

その理由はいくつかあるが、参考までにクラスメイトの意見を聞いてみよう。

「さすが成瀬、全国模試で一桁に入ったらしいじゃん！」

「成瀬くん聞いたよ！ マラソン大会で陸上部よりも速かったんでしょ！」

「うちこの前、成瀬くんが芸能事務所にスカウトされるとこ見たよー！」



俺の学校生活に唯一足りないもの、それは『恋人』だからだ。

だというのに、嘘か真か、女子たちの間には『成瀬くんはみんなのもの』。抜け駆けは禁止。なんて決まり事があるという噂を耳にしたことがある。俺は入学して以来、一度も女子から告白をされたことがないし、噂が本当なら合点がいくわけだが。

俺だって年頃の男子高校生だ。恋愛には興味がある。

ハイスベックな俺との釣り合いを考えるのであれば、目の前にいる花なんてまさにうつつけだ。

小動物のような愛くるしい顔立ちと、大人顔負けの豊満なバスト。人懐っこく天真爛漫な性格をしていて、バレー部のエースで運動神経も良いから、同性からも人気のある正真正銘の美少女。

そんな花と俺が付き合えば、きっと皆が羨むベストカップルになること間違いなしだろう。

——と、そのとき。花のスカートが机の角に引っかかって、下着が見えてしまっていることに気が付いた。

「花、ちよつとごめん」

引っかかっていた裾をつまんで元通りに。今度からはスパッツを穿くことをオススメし

たいところだ。

「ふえっ?! ……あ、あ……ありがと……」

よほど恥ずかしかったのか、先ほどよりも花の顔が真っ赤になる。まあ無理もないか、あのクマさんパンツでは。

俺は紳士的で優しい男だから、高二にもなって子供パンツを穿いていたからといって、むやみからかかったりはしないよ。よかったな、見たのが俺で。

「大丈夫、誰にも見られてないよ。もちろん俺も、中は見えないから」

「よかったあ……今日は自信がないやつだったから、もし和臣くんに見られてたら、お嫁に行けないところだったよ」

クマさんクマさんクマさん……おっと、さっさと邪念は振り払わないとな。彼女の将来がかかっているようだし。

「こほんっ。……けほっ、けほっ」

咳払いをしようとして失敗する花。この子のこういう仕草がいちいち可愛いんだよな。

「落ち着いて。ほら、深呼吸」

すーはー、と花が深呼吸をして仕切り直し。おそらく、花は俺に『用』とやらを伝えるつもりだな。

「実はね、和臣くんにお願ひがあるんだけど……」  
ほらきた。

「ん？ なに？」

素知らぬ顔で訊き返すと、花は言いづらそうにモジモジとし始める。

「とりあえず座りなよ。そこ空いてるし」

リラックスできるよう着席を促すと、花は俺の向かいに座って再び深呼吸をした。

これから始まる話は、花にとってよほど大事なことなんだろう。すごく緊張しているのが見てわかる。

数秒して、花は意を決した様子で口を開いた。

「今週末ね、バレー部の練習試合が決まったの！ ……それで、その、よかつたら試合を見に来てくれないかな？ 和臣くんが来てくれたら、わたし、いつもより頑張れる気がするんだ」

後半の方は消え入るような声で、花は精一杯に言った。

それにしても、試合の応援か。正直なところ拍子抜けだが、こちらに断る理由はない。人付き合いは大切だし、美少女からの頼みとなれば尚更だ。

「へえ、試合か。もちろん応援しに行くよ」

「いいの!? 和臣くん、他に予定とか入ってなかった？」

「平気だよ、今週末は空いてるし」

「やったあ！ 和臣くんのためにも、わたし頑張るね！」

「うん、期待してる」

俺が試合の応援に行くというだけで、花はご満悦の様子。頬に手を当てて、幸せそうにニコニコとしている。

そんな花の眩しい笑顔を眺めていると、視線に気付いた花があからさまに動揺する。

髪の毛先を指で弄びながら、照れ隠しをするように顔を背ける花。耳が真っ赤だつてことは言わない方がいいんだろうな。

「もしかして、断られると思った？」

俺がそれとなく尋ねると、花がちらとこちらを見る。

「だって、和臣くんはいつも忙しいみたいだし……あんまり、その、女の子と遊んだりしないって聞いてたから」

「いや、確かに暇な日はかりじゃないけど、遊びに関しては誘われただけだつて」  
「え、そうなの？」

「ああ、情けないことにね。それに大切な友達からの頼みなら、遊びだろうと試合の応援

だろうと、いつだっけで行くって。まあ、さすがにテスト期間中は無理かもしれないけど」  
花の気持ちをほくそくと思いい、俺は笑顔で言う。

「ぼふんっ」

擬音語のようなものを発したかと思えば、途端に顔を真っ赤にした。

まるで熟れた林檍りんごのよう。花は表情も豊かだし、見ていて飽きないんだよな。

花はおそらく、俺にとっけ一番の友達だ。俺たちは一年の時から同じクラスで、入学してすぐに仲良くなった。彼女は元々人と打ち解けるのが得意なタイプで、その気さくな人柄には何度も救われたっけ。

「えへへ……たいせつだっけ、かずおみくんが……えへへ……」

何やら呪文じゆもんを唱えるようにぼそぼそと呟つぶやく花。

大切な友達と言われたのが、そんな嬉うれしかったのか。

「花？ 大丈夫か？」

「ひゃいっ」

そこでようやく花が我に返ったようだ。

花は俺と目を合わせ、それからすぐに逸そらしたかと思えば、

「今わたし、なんて言っただ……？」

「さあ？ よく聞き取れなかったな」

「うわーん、絶対うそだー！」

「あはは、嘘じゃないって」

「まあ、別にいいけどさ……それじゃあとりあえず、またメッセ送るね」

花は赤面したままそう言っけ、そそくさと自分の席まどに戻っけいった。

……さて。

俺と花の関係について。

見る人によっけは、微笑ほほえましく思っけかもしれない。

俺も以前までなら、『花は俺のこが好きなんじゃ？』と期待したこただろう。

だが、今ならそれが『勘違かん違いい』だとわかる。

そして今回の花の頼み事に、深い意味がないこたも。

なぜその結論に至ったのか、ポイントは熊谷花という女子の人柄にある。

花はそもそも人当たりの良い性格で、異性であろうと同性であろうと一定の距離感きまりがたを保つタイプの女子だ。彼女にとっけ部活動の試合などの『イベント』は、あくまで交友関係の延長線上にあるもの。彼女のようにリア充じゆうな女子であれば、休日に異性と二人きりで映

画を見に行くことすら、『遊び』の範疇に入ることもあるのだ。

すなわち、俺はあくまで友人の一人として、試合の応援を頼まれたに過ぎないというわけだ。

同じように、他の勘違いしそうな部分も論破のしようがある。

女心は複雑だ。彼女たちの行動や言動、仕草の持つ意味合いを『好意』という一括りでは捉えられない大多数の男たちが、勘違いの末に告白して玉砕——という定番の黒歴史を築いてしまうのだろう。

普通の男子高校生では、俺のように冷静な分析はできないかもしれない。俺だって何も、初めからこんな風に考えられたわけではない。

俺にとつてのターニングポイント。それは——

「あはは！ ゆうたセンパイってば、ほんと鈍感ですよねー！」

「いえ、優太くんは鈍感というより、ボーッとしてることが多いだけです」

「あの、琴乃さん……？ それフォローになってないよね……？」

そのとき、廊下から男女の会話が聞こえてきた。

女子の一人があまりにも大きな声で話すものだから、我が二年C組の教室はしんと静まり返った。

会話をしながら教室の前を通るのは男女三人。派手な容姿の茶髪女子と、清楚な雰囲気

の黒髪女子、そして地味でパツとしない男子の三人である。派手な容姿の彼女は、一年A組の鹿野彩夏。雑誌や動画配信などで活躍中の現役アイドルで、学内にもファンが多い美少女だ。

清楚な方の彼女は、二年D組の沖津琴乃。成績が良くクラス委員も務める優等生で、こちらも学内にファンがいる美少女である。

そんな学内屈指の美少女たちを連れて歩くのは、お世辞にも釣り合いが取れているとは言えないレベルの、冴えない男子生徒。

彼こそが、俺の——

「あ、優太やと来たー！ もう始業時間だよー！」

そこで花が声を上げた。

そのままスキップを踏むようにして廊下へ出た花は、男子生徒に向かって一直線。

そして彼の背中に向けて、盛大にタックルをお見舞いした。

「いって……なんだよ花、痛いじゃないか」

男子生徒が不満そうに言うのと、花はムツとしてみせる。

「優太ってば、来るの遅いんだもん。今日だって家の前でずっと待ってたのにい」

「それは悪かったって、メッセ送っただろ。僕だって目覚ましはかけたけど、徹夜でゲームしてたから——」

「わあ、やらしー。ゆうたセンパイってば、夜中にえっちなゲームしてたんですかー?」

後輩女子の鹿野彩夏にからかわれ、冴えない男子生徒は取り乱しながらも否定する。

「変なこと言うなよ!? 僕がやってたのはただのネットゲだって!」

そんな彼を見て、清楚系女子の沖津琴乃が呆れた様子で言う。

「やはり優太くんの日々のスケジュールは、私が管理しないとイケないみたいですね」

「いや、だから——」

「優太だって男の子だし、少しくらいえっちなのは仕方ないけど、だからって遅刻はダメだよ? 次遅れたら、わたしがまた起こしに行くからね!」

花のズレたフォローにより、女子たちの主張がさらに勢いづいていく。

「いいえ、優太くんの起床管理も私の役目です」

「はいはい、ならあたしも起こしに行くー」

「ちよつとみんな、もう勘弁してよお……」



とまあ、こんな風に。

他人様の教室の前で、まざまざとハーレム展開を見せてくれた男子生徒。

彼の名前は、沖津優太。二年D組の生徒で、成績は中の下、部活動には所属しておらず、野暮<sup>やぼ</sup>つたい髪型以外にこれといった特徴<sup>とくちょう</sup>がない冴えない奴<sup>やつ</sup>。

——この沖津優太との出会いこそが、俺にとつてのターニングポイントである。

『成瀬はすごいよね。僕なんかと違<sup>ちが</sup>って友達が多いし、頭も良いし。ほんと、雲の上の存在だよ』

出会った当初、彼は俺にそんなことを言ってきた。

俺だって彼のことは、人畜無害<sup>じんじくむがい</sup>な雲の下の存在だとは思っていないなかった。

だが、すぐにその考えを改めさせられる。

現在進行形で見せつけられているハーレム構造。これは何も、今に始まったことではない。

まず、花が彼を慕<sup>慕</sup>っている理由。それは二人が幼馴染<sup>おきななじみ</sup>だからだ。ここまではいい。

だが鹿野彩夏に関しては、理由はよくわからないが、噂<sup>うわさ</sup>では互いの家に通うほどの間柄<sup>あいだがら</sup>

だという。

そして残る沖津琴乃だが、俺の知っている情報や噂から推測する限り、彼女はおそらく彼の恋人<sup>こいびと</sup>だ。兄妹<sup>きょうだい</sup>……にしては似ていないし、二人の名字が同じなのは偶然<sup>ぐうぜん</sup>だろう。

これが入学直後から続く沖津優太のハーレム構造である。鹿野彩夏に関しては、去年の学校見学や文化祭のときから、沖津優太と仲が良いのは確認<sup>かくにん</sup>済みだ。

俺も彼女たち三人とは親しい方だ。だが、ハイスベックで人気者の俺よりも、沖津優太の方が彼女たちと親密な関係にあるのは明らかだった。

冴えないくせに美少女たちから囲まれる地味系男子。まるで漫画<sup>まんが</sup>やアニメに出てくるラブコメ主人公のテンプレだ。

そして彼が『主人公』ということは、その周囲にいる俺は『モブ』ということになるわけ。

ゆえに考えた。

モブに対して美少女——いわゆるヒロインが好意を寄せることなどあり得ないのだから、俺が彼女たちから告白の一つもされないのは当然<sup>当然</sup>だ、と。

何も、そんなバカげた話を最初から本気で考えていたわけじゃない。

だが、俺自身がモブであることを前提にした上で彼女たちと接していると、つい『この

子は俺のことが好きなんじゃ？」と勘違いしそうになるいろいろな場面を、全て論破できることに気が付いた。

振られるのは嫌だ。惨めな思いはしたくない。自分から告白をするとしたら、それは相手からの好意を百パーセント確信できた場合のみ。

そうやって恋人が出来ないまま今に至り。

「やれやれ。少しはみんな、僕のことを放っておいてくれよ」

俺は沖津優太というやれやれ『主人公』の存在を認め、自分が『モブ』であることを受け入れていた。



昔から他人にどう見られているのか、そればかりを気にして過ごしてきた。

今のご時世じゃ、そんな奴ばかりだと思う。

俺は元々自分のスベックに自信があったし、他人から良く見られるための努力なら苦にも感じなかった。まだ見ぬ恋愛には希望を抱いていたし、失敗するなんてこれっぽっちも考えなかった。

だが、中学三年の冬。

俺は失恋した。初恋だった。

相手は年上の大学生。俺の家庭教師を務めてくれていた女性だった。

振られた理由は……なんだったかな。よく思い出せないし、思い出したくもない。いずれにせよ、俺はそのとき大きな挫折を味わい、自信を失った。

その後、中学を卒業したことで心機一転。高校に首席で入学し、俺は周囲から注目を浴びた。

これで俺は完璧に立ち直れる——そう思った矢先、主人公・沖津優太と出会い、そして『あの女』が同じ学校にいることを知った。

それから一年余りが経つ現在。

俺の学校生活は、『あの女』のせいで灰色一色に染まろうとしていた。

「成瀬くん！ 『沼底の魔女』と付き合ってるって噂はほんと!？」

夕暮れ時の放課後。普段は憩いの場として使用することのある中庭で、俺は他クラスの女子数人から詰め寄られていた。

「はは、なにその噂。初耳だなあ。俺は相変わらずフリーだよ」

「でも一緒に帰るところを見たって子もいるんだけど?」「あたし昼休みにお弁当を

一緒に食べてるとこ見たよ!」「SNSでも噂になってるよね」「もうやだ、なんでよにもよってあいつなの……?」「説明してもらわないと納得いかないよ」

ヒートアップした女子たちが次々にまくし立ててくる。どれも誤解ではあるが、今の彼女たちに否定の言葉は届かないようだ。

モブであることを自覚している俺にはわかる。この子たちは、別に俺のことが好きじゃなくてもいい。『人気者の成瀬和臣』という存在がいることをただ楽しんでいて、それが失われることが面白くないだけなのだ。

ちなみに、『沼底の魔女』というのは『あの女』に付けられたあだ名だ。『沼底』の部分は、彼女が入学直後に校内の池に飛び込んだことをきっかけに付いたもの。『魔女』の部分については、彼女の悪口を言った奴が不登校になったとか、嫌がらせをした奴がテスト当日に熱を出して留年したとか、そうした出来事を呪いや黒魔術といった類と誰かが無理矢理にこじつけた結果である。

そんな相手と交際しているという噂が流れれば、多大なイメージダウンは免れない。これ以上被害を拡大させないためにも、この辺りではつきり言っておこう。

「俺が黒日奈さんと付き合っているなんて話はデマだよ。誰が言い出したのか知らないけど、相手にも迷惑がかかるからやめてもらえるかな?」

ちよつとキツめの言葉を、笑顔でやんわりと伝える。

それだけで女子たちは牙を抜かれたように大人しくなる。

「……けど、『魔女』の方は満更でもないみたいだよ」

一人の女子がおそろおそろといった様子で言う。

満更でもない? あの女が何か言ったのか? だとしたら、大問題だ。

「もしかして、黒日奈さんが俺と付き合ってるって言ったの?」

「うん……。だから今回の話は、みんな本気で信じてるよ。じゃないとウちらだって、成瀬くんに直接聞いたりしないよ」

その女子は今にも泣き出しそうだった。

これは困ったことになった。俺のメンツを守るためにも、付き合うとしたら基本は美少女から告白をされたときだけと決めていたのに。よりにもよって『あの女』と交際しているという噂が広まり、しかもそれを皆が信じ始めているという。これは俺の沽券に関わる死活問題だ。

「とにかく、俺にその気はないから。できれば誤解をしないでもらえると嬉しいな」

努めて爽やかに。笑顔で言うと、彼女たちはようやく納得してくれたようだった。

彼女たちが去っていった後、ポケットからスマホを取り出す。

さて、『あの女』に連絡をして、噂の件を撤回してもらわないとな。

つんつん。

そのとき、後ろから肩をつつかれた。

「ん？ まだ何か——うわあっ!？」

思わず悲鳴を上げてしまう。

振り返った先には、長い黒髪を元まで伸ばし、白すぎる肌と華奢な身体をした女子生徒の霊——改め、『沼底の魔女』こと黒日奈美玖が立っていたのだ。

全く気配を感じなかった……。どれだけ存在感が薄いんだよ、この女。

「こんにちは、和臣。かわいい悲鳴だね」

黒日奈は淡々とした口調で言う。

その竹まいからは、どうにも暗い印象を受ける。それに呪いや黒魔術の類を本当に扱えるのではないかと思うくらい、どこか得体の知れない雰囲気があった。

「いきなり現れるなよ、心臓が止まるかと思ったぞ」

「ちゃんと肩はつんつんしたよ。ほくだつて女の子なのに、傷つくなあ」

「全然傷ついているようには見えなけれどな。まあ丁度よかった、お前に話があるんだ」

「ぼくにメッセを送ろうとしてくれていたもんね」

画面を覗き見たのか。というか、いつからいたんだ？ 先ほどのやり取りの一部始終を見ていないと、こうもタイムミング良く現れないよな……—と、今はそんなことより、

「場所を移すぞ。ここだと人目につく」

「ふふ、逢い引きだね。それなら良い場所があるよ」

これだよ、これ。きつとこんな風にくだらないことを言つて、先ほどの女子たちのことでもからかったんだろう。普段の憂さ晴らしのつもりか知らないが、こっちはいい迷惑だ。

腹は立つが、今は一刻も早くこの場を離れることが先決である。二人で話しているところを他の生徒に見られてもしたら、よからぬ噂が増長されるだろうからな。

「人目がない場所ならどこでもいい。案内してくれ」

「うん、喜んで」

俺はできる限り黒日奈と距離を空けながら、その後ろを付いていった。



この都立松場高校には、本校舎の他に第二校舎が存在する。文化棟とも呼ばれるその場所の廊下には文化部の部室が並んでいて、奥には倉庫と化し

た教室がいくつかある。

その突き当たりにある、使われなくなった空き教室の一つ。改築もされず、鍵の壊れた扉に黒日奈が手を掛ける。

広さ自体は普通の教室と同じ。端の方にいくつかの机と椅子が乱雑に積み重ねられているだけの、ひどく殺風景な空間。

普段ならこんなひと気のない場所に来たくもないが、今の状況にはうってつけだ。何せ、『あの女』との密会なのだから。

ふと気付くと、すぐそばにいたはずの彼女がいつの間にか窓際に立っていた。

長く真っ直ぐな黒髪に、消え入りそうなほど白い肌。できるだけ肌の露出を減らしたいのか、黒いタイツにサイズが大きめのカーディガンを着ていて、そのせいもあって地味で暗い印象を受ける。

その上、前髪で目元が隠れているせいで表情が読み取れないものだから、彼女と対面しているだけで心が落ち着かない。おそらく、彼女と一緒にいて平常心を保てる生徒など、校内のどこにもいないだろう。

彼女——黒日奈美玖は、校内で浮いた存在だ。『沼底の魔女』と呼ばれるのも納得がいくほど、どうしようもなくネガティブなイメージが付きまとう女子生徒である。



そんな相手と空き教室に二人きりでいる現状は、はつきり言っただけだ。居心地が悪い。早々に事を済ませよう。そう思っただけで本題を切り出そうとしたところで、窓の外を眺めていた黒日奈がこちらを向いた。

それからふっと微笑んだかと思えば、

「二人つきりだね。とても居心地が良いよ」

この女、きつとエスパーだ。

「……本題に入ろう。噂の件だ」

この女と長話するのは危険だ。何がとは言わないが、俺の本能的な部分が警鐘を鳴らしている気がする。

「なんのこと？　ぼくはただ、和臣と逢い引きしたかっただけだよ」

黒日奈はとぼけた様子で首を傾げる。……そっちがそう来るなら、主導権はこちらが握らせてもらおう。

「俺も暇じゃないんだ。お前が話さないなら、こっちから言わせてもらう」

「どうぞ」

その不敵な笑みを見ると、どうしても何か企んでいるような気がして、つい躊躇ってしまう。

「どうしたの？　落ち着いて。なんでも気軽に話していいよ」

「……お前、他の生徒に俺と付き合ってるって言ったらしいな。困るんだよ、そういう嘘を吹聴されると」

俺の言葉の何が面白いのかわからないが、黒日奈は笑みを深めて言う。

「ぼくは別に、嘘なんてついてない。ただ、『成瀬くんに付き纏わないで』って一方的に言われたから、『きみたちには関係のないことだよ』って返したただけだよ」

「はあ、なんてことを……」

その発言は世間一般だと、疑惑を黒だと認めたことになるんだぞ。

まさか、そのことを理解した上で言ったんじゃないだろうな。

「別にぼくは誤解されたって構わないよ、ぼくと和臣の仲だし」

「構わないわけないだろ。それに俺たちは友達でもなんでもない、ただのクラスメイトだろうが」

厳密には、ただのクラスメイトってわけでもないが。

ちなみにクラスは同じでも、普段の彼女は大人しいどころか無口。よって、教室で俺と彼女が関わることは滅多にない。

「ぼくはそう思っていないよ」

「俺はそう思ってるんだよ。——とにかく、お前と付き合っていると誤解をされたままだとこつちが困るんだ。さっさと撤回してくれよ」

「イヤ」

「なっ……!?! お前、一体何を考えて——」

「それに」

黒日奈は俺の言葉を遮るようにして、続きを口にする。

「ぼくが今さら撤回をしたところで、校内に広まった『こんなに面白い噂』は、そう簡単に消えたりしないと思うな」

心なしか、彼女の声が弾んでいる気がする。失うものが無い奴は気楽でいいよな。

校内にはこういった噂を面白おかしく話すのが日課のような連中がいるし、一度広まった噂はそう簡単には消えない。一番効果的な手段といえは、ほとぼりが冷めるまで適当にやり過ごすことである。……でも、今回限りはそれじゃダメなんだ。

「お前は俺に、みんなが飽きるまで、お前と恋人だと思われたまま我慢をしろって言いたいのか? 冗談を言うのも大概にしてくれよ」

「はあ」

そこで黒日奈はあからさまにため息をついてみせ、

「なら、和臣がなんとかすればいいよ。嫌われ者で変人のぼくなんかより、人気者の和臣の方が、よっぽど大きな影響力を持っているはずだよな」

だめだこいつ、何もわかっちゃいない。

「あんな、こういった噂を必死になって取り消そうとしてみる。俺の『いつも余裕があるてかっこいい成瀬くん!』というイメージが台無しになるだろうが」

黒日奈は服の袖で口元を隠して、不気味に笑い出した。

「ふふっ、和臣は本当にイイ性格をしてるよね。周囲の評価や体裁ばかりを気にして、自分を虚偽の仮面で着飾って。嫌われることを誰よりも恐れる、自尊心の塊みたいな人だ」

「放っておいてくれ、そういう性分なんだ」

この女はよく見ている。人を——というより、俺のことを。

こういった洞察力を処世術の方にも活かせば、もう少し上手く馴染むことだって出来ると思うんだけどな。それと、女のくせに『ぼく』と言う変な一人称も直す必要があるか。

「でもそんな和臣も、ぼくにだけは素の部分を見せてくれるよね。すごく嬉しいよ」

訂正。この女は何かひどい勘違いをしているようだ。

「言っとくが、俺はお前にこれっぽっちも好意なんか持っていないからな。そこだけは勘違にするなよ」

「そうなの？」

黒日奈がまたとほけてみせる。その仕草を見てみると、なんだか無性に腹が立つ。

唇をすぼめて小首を傾げる、その仕草自体は美少女がやれば様になるだろう。だがこの女の場合、前髪オバケの陰キャ女子だから可愛らしさの欠片もない。それにこちらをからかう意図があるのも丸わかりだ。

「勘違いしているようだから言ってみよう。——俺がお前に粗雑な態度を見せるのは、お前の前でかっこつけても意味がないからだ。他意はないぞ、ついでに興味もない」

「なるほど。でも、ぼくが和臣の本性をみんなに暴露するって可能性は考えないの？」

「は、誰もお前の言葉を真に受けたりしないって。——あ」

自分で言ってから気付く。  
 「そう。ぼくの言葉なんて、誰も真に受けない。聞く耳を持たない。それが面白い噂を否定するようなものであれば、なおさらね。せいぜい、勝手に都合良く解釈されるのが関の山だよ」

「……わかったよ。結局、俺が自分でなんとかするしかないって言いたいんだろ」

「うん、ようやくわかってくれたみたいで何より。和臣って頭が良いのに馬鹿だから、上手く伝わるかどうか心配だったんだ」

「失礼な、俺が馬鹿なわけではないぞ」

黒日奈は小馬鹿にしたように微笑んでから、椅子の一つに腰掛けた。

「そんなナルシストの和臣に朗報だよ」

「またくだらないことを言うんじゃないだろうな」

「ひどいなあ。——実は和臣にびつたり解決法があるんだけど、聞きたい？」

「嫌な予感しかないけど、聞かせてくれ」

この女のペースに合わせるのは癪だが、こは素直にいこう。他に良い案があるわけでもないしな。

黒日奈は俺の返事に満足いったのか、上機嫌に足をぶらぶらさせながら言う。

「和臣が恋人を作ればいいんだよ」

さらりと口にしたその言葉は、俺の耳を素通りしていく。

「……それが、俺にびつたり解決法ってやつか？」

「そうだよ。和臣には何人か仲の良い女の子がいるでしょう？ その中の一人と付き合ってください。自分のスベックに自信があるなら、それくらい簡単なはずだよ」

「残念だが、それは無理な話だ。自信があるとかないとか、そういう問題じゃなくてな」

黒日奈はぶらぶらさせていた足を止めて、代わりに首を傾げた。

「自分の目的のために女の子を利用する気にはならないとか、そういう理由かな？」  
 「いや、もっと単純な話で。彼女たちはみんな、俺のことなんて眼中にないんだ。残念な  
 がらな。具体的に言えば、みんな他に好きな人がいる」

黒日奈が意外そうにしている。珍しいことでもあるものだ。

「ずいぶんと驚いているじゃないか。そんなに意外だったか？」

「うん、意外だった。ナルシストな和臣が珍しく、自分のことを過小評価してるから」

「俺はナルシストじゃなくて、リアリストだからな。良いものは良いと言うし、無理なもの  
 は無理と判断する。自分のことだって、実際に頭も顔も良いから誇っているだけだ」

まあ、沖津優太との奇妙な対立構造を受け入れている時点で、生粋のリアリストとは呼  
 べないかもしれないけどな。

「でも、それならなおさら納得がいかないな。ぼくからすれば、和臣は十分すぎるくらい  
 モテているように見えるもの」

「自分と他人とじゃ、興味を持つ度合いが違うからな。差異が生じるのは仕方ないこと  
 だ」

「そうだね。その通りだと思う」

「珍しく意見が合ったな」

「なら告白をしてみてよ。どちらの価値観が正しいか、それではつきりするはずだよ」

いやこの女、全然納得してなかった。

やっぱり俺とこの女の意見が合うことはないらしい。

それにしても、やけに食い下がってくるな。さてはこの女、俺が振られて落ち込むとこ  
 ろを見たいだけだな？

その手には乗るものか。

「言っとくけど、告白はしないぞ。相手からオッケーが出る確証がない限りは絶対にな」

俺の宣言を受け、黒日奈はぼかんと口を開けていた。

ああ、わかっている。今の発言がダサいことぐらいは自分でも。

それでも、振られるのもうごめんなんだ。

「やっぱり、まだ引きずってるんだ」

唐突に、黒日奈がそんなことを言い出した。

「……えっと、なんのことだ？」

「言わなきゃわからない？ 姉さんとのことだよ。本人から聞いたんだ、和臣を振ったこ  
 と」

「……………」

その言葉に古傷を抉られた気がして、意味もなく胸を押さえる。  
 そう。俺の初恋相手は、ここにいる黒日奈美玖の姉だ。

そういつた経緯もあって、俺はこの女が苦手だ。できれば関わりたくない。この女を見ていると、どうしてもあの人のことが頭をよぎってしまうからだ。

けど、振られたことをこいつが知っているのは意外だった。姉妹仲は良かったんだな。万が一、こいつと付き合っているなんてデマがあの人々の耳に入ったりしたら、多分俺は引きこもって不登校になるだろう。そうならないためにも、今のうちに口止めをしておかなければ。

「言うなよ？ 今回のデマのこと」

「もちろん。そもそも言う必要がないよ、姉さんには全く関係のないことだしね」

「くっ……」

それはそれで、なんだか寂しい気もする。……いや、この女がそう言うなら好都合か。

「ごほん」

そこで黒日奈がわざとらしく咳払いをした。

それからひよいと立ち上がったかと思えば、くると背中を向けて考え込んでみせ、「お手上げだね」

「溜めに溜めた後に言うことかよ……」

「だってこうなると、一つの結論しか思いつかないんだもの」

「へえ、結論が出たのか。なら、それはお手上げとは言わな——」

「『和臣はぼくと恋人になりたい』、つまりはそういうことでしょ？ 嫌がるフリをして、本当に素直じゃないね。そうならそうと初めから言えはいいのに」

………ん？

聞き間違いだろうか。肝心なところを聞きそびれた。もう一度確認してみよう。

「ごめん、最初の方がよく聞き取れなかった。もう一度言ってもらっていいか？」

「『和臣はぼくとえっちがしたい』ってことでしょ、って言ったんだよ」

「そうは言っただろ!? というか何を恥ずかしげもなく言っただろ!?」

黒日奈は呆れた様子で肩を落としてみせ、

「意味は同じようなものですよ。えっちぐらいで取り乱すなんて可愛いね、和臣も」

しれっと言いやがって。ああもう、イライラする。

ひとまず落ち着け、落ち着くんぞ俺。

このままではこの女のペースだ。肝心なのは、なぜこの女がそれほどおぞましい結論に至ったのかということ。

「まず言っておくが、それは無い。断じて無い。——で、どうしてそんな勘違いを？」  
 「女の子に好きな人がいるくらいいで、自信過剰な和臣が諦めるとは思えなくて。和臣はラ  
 イバルがいた方が燃えるタイプだと思うし」  
 買い被りすぎだ。

確かに俺は、自分のスベックに自信がある。

ただ、『自分がモブである』という抗えない仕組みのようなものを知った今では、自信  
 だけじゃどうにもならないこともあるんだ。

黙り込む俺を見て、黒日奈は興味津々といった様子で腕を組んだ。

「和臣は何を隠してるの？ どうしてもっと積極的に頑張らないの？ その理由を教えて  
 ほしいな」

「それは、その……」

黒日奈が真っ直ぐ見つめてくる。彼女の目元が見えなくても、今は俺のことを凝視して  
 いるのがわかる。

「……馬鹿にしないって、約束するなら話すよ」

「うん、約束する。だから話してよ」

優しく囁くように、黒日奈が先を促してくる。

「わかった、話すよ。俺と、沖津優太のことを——」



それから十五分ほどが経ち。

俺は自分が『モブ』で、沖津優太が『主人公』であることを認めるまでの流れを事細か  
 く、黒日奈に説明し終えた。

すると、黒日奈は袖を口元に当てて、

「ふふふ……」

笑いを堪えているのがわかる。

こいつ、馬鹿にしないって約束したことをもう忘れてるのか？

「お前な……」

「いや、ごめんね。つい、嬉しくって」

「嬉しい？ 他人の不幸をそんなに喜べるなんて、お前もイイ性格してるよな」

「だって、あまりにもツッコミどころが多かったから。——けどそれよりも、安心した。  
 和臣が、ぼくの知ってる和臣のままできて」

「意味がさっぱりわからないな。お前は何が言いたいんだよ」

黒日奈は袖をどけて、なおもニヤリと口元を歪ませ、

「やっぱり和臣はクズのままだった。正真正銘、人間としてのクズ。そのことにすごく安心したんだよ」

この女、今二回も俺のことをクズって言ったよな。

やっぱり馬鹿にしているんじゃないか。ったく、失敗だ。どうしてこんな奴に話してしまっただんだか。

だが、このまま言われっぱなしの俺じゃない。

「言わせておけば、俺のどこがクズなんだよ。綺麗事は抜きで説明してみろよ」

黒日奈は人差し指を立てて、

「一つ、沖津優太を心底見下している」

「事実に照らし合わせて適切な評価を下しているだけだ」

「一つ、彼女たちの気持ちを身勝手に決めつけている」

「状況と照らし合わせて推測しているだけだ」

「これが最後。——重要な事柄が一つ、説明から抜け落ちている」

「重要な事柄？ なんのことだ？」

「それがわかっていないから、和臣はクズだって話だよ」

黒日奈は笑みを浮かべたまま、俺の隣にすっと並んでくる。

なんだろう。この女が至近距離にいと、平常心が保てない。そのせいか、頭も上手く回らない。

心臓の鼓動が急激に速くなり、全身から嫌な汗が噴き出る。

「……降参だ。教えてくれ」

たまらず白旗を上げると、黒日奈は満足そうに頷く。

「ぼくにはあつさり認めてくれるんだね。嬉しいな」

黒日奈は意味深なことを言ってから、一歩後ろへ下がる。

「素直な和臣に免じて、特別に教えてあげる」

とん、と背中 hands が触れてきて、

「——和臣はね、沖津優太に負けたんだよ」

その言葉の意味を、すぐには理解できなかつた。ただそれでも、反射的に言葉が口を突いて出る。

「俺があいつに、あんな奴に、どんな分野だろうが負けるわけないだろ」

呆れたのはこちらの方だというのに、黒日奈はわざとらしくため息をついてみせる。

「いいや、負けてるよ。だって、意中の女の子の根こそぎ持っていかれたんだもの。でもきみは、そんな状況でさえ、自分のプライドを守るために頑なに負けを認めようとしな。きみのそんなところが、どうしようもなくクズだって言ってるんだよ」

「違う、俺は負けたんじゃない。ただ、そういう立ち位置だったってだけの話で——」

「なるほど、こと恋愛関係において、和臣はあの地味男くんに立ち位置からすでに負けていて、勝負以前の問題で負けていて、言い訳のしようもないくらい完膚なきまでに大敗していた——つまりはそういうことだね」

「くっ……」

違う。違うんだ。あいつは主人公で、俺はモブキャラ。ヒロインは主人公に想いを寄せるところだと相場が決まっている。だから勝負とかそういう話じゃないんだ。

じゃないと、俺があんな地味男に、恋愛で負けるはずが——

「認められないのも無理はないよ。その矛盾を認めてしまったら、もう和臣には何も残らないもの」

「……違う。だって、この完璧な俺がやっと友達になれた子と、あいつはとつくに家族同

然の付き合いをしているんだぞ？ あんな地味な奴が俺よりもモテるなんて、そんなの、あいつがラブコメの主人公で、俺がモブキャラだって以外にあり得ないだろうが」

「ふふっ」

そこで黒日奈が吹き出すようにして笑った。

「何がおかしいんだよ」

「ごめんね、馬鹿にしてるつもりはないんだ」

俺はこの女の、達観したようなところが嫌いだ。自分の手が届かない、理解の及ばない領域を他者が把握しているというのは、ひどく居心地が悪い気分になる。

そんな俺の心情を汲み取ってか、黒日奈は愉快そうに人差し指を立てた。

「ねえ、一つ尋ねたいんだけど」

「まだあるのかよ」

もうたくさんだ、と言ってもこの女は話し続けるだろう。

聞きたくなければこの教室から俺が出ていけばいいだけの話だが、それこそこの女の意見を認めることになる気がして、どうしても出来なかった。

「ばくとの噂が無くなれば、和臣にはこれまで通りの学校生活が戻ってくるよね。でも、それで和臣は満足いくの？」

「当たり前だろ、何を今さら」

「本当にそう？ 自分には恋人ができません、地味でなんの取り柄もないと見下しているはずの相手と意中の女の子がイチャつく様を見せつけられるだけの学校生活……そんな灰色の青春で、プライドが高く負けず嫌いの和臣が納得できるとは思えないんだけどな」

「……………」

自然と握る拳に力が入る。

この一年間を回想して、確かに自分が満足していないことに気が付いた。

自分を納得させられる理由をこじつけて、無理やり納得したフリをしていただけなのかもしれない。そう思い始めたとき、知らぬ間に黒日奈が隣にいて、

「このままだと、卒業するまで『負け犬』だよ」

まるで俺の心の中を読んでいるかのように、この女は畳みかけてくる。

「もしくは『かませ犬』かな。沖津優太くんっていう、主人公（笑）のためのね」

「——ッ！」

屈辱だ。

俺があいつの『かませ犬』だって？ ふざけるな。俺は成瀬和臣、文武両道の人気者。逆の立場ならあっても、俺があいつの『かませ犬』になることは絶対にあり得ない！

「俺はっ——」

反論をしようとして振り返ったとき、ふと黒日奈の笑みが目に入ったことで、頭に乗っていた血がすーっと引いていく。

「俺は、お前の思惑通りには動かない」

冷静になったことで、理解したのだ。

この女が今、自分の目的のために俺を焚き付けようとしていたのだと。

こいつの目的が何なのかはわからない。だが、それがどういった目的であろうと、他のやつに利用されるのはごめんだ。

「へえ、思惑か。それならばよくには、何か他に目的があるということになるね」

「その目的が何なのかはわからない。ただ、お前が自分の目的のために、俺を焚き付けようとしていることだけはわかる。伊達にお前と一年過ごしてないからな」

「正確には一年じゃないけどね。まあいいや、確かにきみの言う通りだし。ご褒美と言っではなんだけど、ぼくの目的とやらを教えてあげよう」

やっぱり目的があったのか。恐ろしい女だ、危うく利用されるところだったぞ。

黒日奈は悪びれもせずに、さらりと言う。

「ぼくの目的は、和臣に姉さんのことを忘れてもらうこと。——ただ、それだけだよ」

予想外の目的を聞かされ、俺は動揺しつつも尋ねる。

「……どうして、それがお前の目的になる？」

「正直、鬱陶しいんだよね。身近な人間が、ぼくの身内に振り回されているのを見るのは」

「お前の目から見て、俺はそんなにあの人のことを引きずっているように見えるのか」

「うん、とつても。はっきり言って不愉快だよ。——きみが新しい恋をすれば姉さんのことを忘れてくれるかもしれないと思ったけど、まあ、きみ自身にその気がないなら仕方ないね」

姉妹仲が良い、というのは違うのかもしれない。

俺はこいつとその姉がどういった関係なのか、ほとんど知らない。別に、興味もなかったからだ。ただ、

「お前の目的は理解した。それでも、利用されるのはごめんだ」

「そ。残念」

案外、あっさりしている。他に何か思惑があるんじゃないかと疑いたくなるほどだ。

警戒する俺をよそに、黒日奈は窓際まで歩いてそつと窓を開けた。

外から吹き抜ける風が黒日奈の髪とカーテンを揺らし、俺はその光景にただ見入ってし

まう。

「あのね。きみが沖津優太くんに立ち向かう決心をしよう、これまで通りそっぽを向き続けようと、ぼくは伝えようと決めていたことがあるんだ」

そう言って、黒日奈はこちらに振り返る。

夕日を背に浴びて影を伸ばすその姿は、どこか怖いくらいに幻想的だった。

彼女は小指を唇に添えると、呪文でも唱えるように口にする。

「——安心して、ぼくのクズ王子。たとえ負け犬のまま終わろうとも、ぼくはずっと見ていてあげるから」

それだけ言って、黒日奈は窓の外に向き直った。

愛の告白、つてわけじゃないだろう。きつとこれは、『呪い』みたいなものだ。

もちろん、そんな超常的なものがこの世に存在するはずもないが、それでも俺はそう感じずにはいられなかった。

だからこそ、悪いものを振り払うつもりで言う。

「安心するも何も、俺は誰にも負けるつもりはない。ただ、自分のやり方でやるだけだ。」

それにあの人のことだって、いつまでも引きずっていくつもりはないしな」  
 具体的な打開策があるわけではない。ただ、言われればなしは癪だった。  
 俺がそのまま教室を出ようとしたところで、黒日奈が顔も向けずに言う。  
 「ああそれと、帰りは気を付けてね。放課後の学校では、どんなドラマが生まれるかわからないから」

「ご忠告どうも」

ドラマなんてそう起こってたまるか。沖津優太じゃあるまいし。  
 しかしまあ、今日は急いで帰ろう。

黒日奈のせいで、嫌な胸騒ぎがするからな。



文化棟と本校舎を繋ぐ渡り廊下を早足で通り、靴を取りにC組の教室へ。

すでに無人となっていた教室に入って靴を手にし、そのまま昇降口に向かう。  
 階段を下りたところで、聞き覚えのある声があった。

「部活おつかれさま。僕も今日は委員会があったから待ってたんだ、ちょっと話したいこ

ともあったし」

これは沖津優太の声だ。あまりにも特徴がないからこそ、逆にわかってしまう。

そしてこの言いぐさからすると、話し相手は——

「そ、そっか、うん、ありがと。……それで、話したいことって？」

やはりこの声、相手は花で間違いない。

花の声は緊張して上擦っているように聞こえる。

俺は気付かれないよう息を潜めながら、声がするうちのクラスの下駄箱を覗き見る。

すると、そこにはやはり沖津優太と花の姿があった。どうやらこの場には俺を除いて、二人きりのようだ。

そわそわと落ち着かない様子の花に対し、沖津優太は困り顔で言う。

「えっと、その、ちょっと言いづらいんだけどさ……」

「う、うん？」

そこで、沖津優太は靴から手紙のようなものを取り出す。

「——ッ！」

それを見た花はビクツと肩を震わせ、そのまま硬直する。

「これ、書いたの花だよな？ 差出人の名前に『熊谷花』ってあったし」

「あ、あうう……」

花は顔を真っ赤にして俯いてしまう。

まさかあれは、ラブレター!? 花が沖津優太宛てに書いたのか！  
俺はなんて現場に遭遇してしまったんだ！

ついパニックを起こしそうになる。だが次の瞬間、俺の耳には信じられない言葉が入ってきた。

「——はい、返すよ。僕の下駄箱に入ってたんだ。入れる場所を『間違える』なんて、花は本当にすっかり屋さんだなあ。宛名だって書いてなかったし、今度からは間違えないようにね」

沖津優太はそう言つて、本当に花へ手紙を返した。

「……………」

それを受け取つた花は、黙り込んだままである。

そんな彼女に構わず、沖津優太は何事もなかったようにさらりと言う。

「じゃ、そろそろ帰ろうか。お腹減つたし」

沖津優太は先導するように歩き出したかと思えば、ふと何かを思い出したように振り返り、

「そういえば、その『ラブレター』って結局、誰に渡すつもりだったの？」

ぼふんつ、と。その瞬間、花はさらに顔を真っ赤にして、

「ゆ、優太には関係ないもんっ！ ばーか！」

そう大きな声で叫んだかと思えば、沖津優太の後頭部に鞆を打ち付け、そのまま走り去つていった。

残された沖津優太は後頭部をさすりながら、不満そうに呟く。

「いてて……まったく、困った奴だなあ」

とぼとぼと歩き出したその背を見送つたのち、俺は——

「……フツ、フフフ……」

溢れ出しそうになる笑いを必死に堪えていた。

甘酸っぱいどころじゃない青春的一幕を見せつけられ、気が動転しているのではない。

むしろ、俺は憤っていた。

花が普段から沖津優太を慕っているのは、誰の目にも明らかである。幼稚園の頃から一緒の幼馴染というものは、きつと一般的な友達とは比較にならないほど近い存在なのだろ

う。  
そんな二人の間に、恋心が芽生えても不思議じゃない。

そして今回、花は勇気を振り絞ってラブレターを書いた。

だというのに、あの男はそれを『間違い』だと決めつけ、無かったことにした。

彼からラブレターを誰に渡すつもりだったのかと聞かれた際に、顔を真っ赤にしていた花の気持ちを想像するのは容易である。きっと、恥ずかしくて穴があつたら入りたい気分だったに違いない。

あいつは花に——女の子に、恥をかかせた。それは絶対に許されないことだ。

あんな男に、美少女を——いや、俺の幸せを奪われてたまるか。

俺なら絶対、あいつのように女の子の好意を無下にすることはしない。

ゆえに、俺はある目標を定めた。

自らが定めた目標を達成するためには、決意表明をするのが効果的だ。そのおかげでいつも、テストでは高得点が取れている。

だから。

「——俺は必ず、あの沖津優太から女子を奪い取ってみせる！ 必ずだ！」

花に限ったことではない。あの鈍感系主人公の取り巻き、被害者の全員が対象だ。

決意表明を終えたところでタイミンが良く、下校時間を報せるチャイムが鳴った。

俺は靴を履き替えて校舎を出たところで、ふと黒日奈の言葉を思い出す。

『ああそれと、帰りは気を付けてね。放課後の学校では、どんなドラマが生まれるかわからないから』

あいつの言葉通り、ドラマとやらが起こってしまった。

それは俺に直接関わるものではなく、やはりというか、沖津優太の身に起こったものだったけれど。

その出来事をきっかけに、俺はあいつの迷惑通り、沖津優太と戦う道を選んだ。

「ふう、考えても無駄だな。『予言』とか、そういうものがあるわけもないし」

気持ちを切り替えようと思い、スマホのスケジュール表を確認する。そこで週末のところにチェックが入っていることに気が付いて、思わずニヤついてしまう。

「あんなことがあつたんだ。花のことは今週末、俺がしっかりと応援してやらないとな……ッ」

おつといけない、ここは公衆の面前だ。少なくとも家に着くまでは平静を装わないと。高笑いするのは、心の中だけに留めておこう。

続きは、2月20日発売のファンタジア文庫で！

©Riku Tozuka, Konbu Wakame 2020